

キャンドルサービス 展開例1

第1部 迎いの火の儀式

第3部 送りの火の儀式

1 全員入場

- 静かに入場して、各班ごとにキャンドル台を中心に円形に立つ。
- 火の守は、キャンドルサービスの意義、ルールについて説明する。「資料2-例1」
- 私語はしない。
- ※女神・火の守は、ローソクを持って準備し配置につく。

2 夜の歌

- 「遠き山に日は落ちて」を歌詞で歌い、続いてハミングで歌う。BGMでも良い。歌が始まったら照明を消す。

3 灯の入場

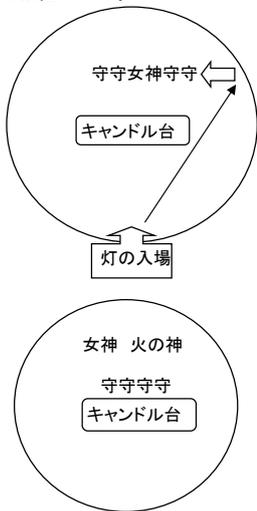
- ハミングになったら灯が入場する。
- ※女神がトーチを持ち、女神を先頭に、火の神、火の守と続き入場する。

4 火の神の閉会の言葉「資料1-例2」

- 女神は、火の神をローソクの明かりで照らす。
- 火の神は、火に関すること、研修の目的や成果、友情、生命、平等について2~3分感銘を与えるように話し、閉会を宣言する。「資料2-例6」

5 火の守へ分火

- 女神は、火の神にローソクを渡す。
- 火の守は、火の神の前に整列する。
- 火の神は、一人一人に声をかけながら分火する。「資料1-例3」



1 準備

- 各自ローソクを持って円形に立つ。
- 照明が消えたら、火の係は配置につく。

2 歌

- 2部の楽しい雰囲気から、3部の儀式に気持ちを落ち着かせるような歌が良い。「ふるさと」、「シャロム」、「遠い世界に」



3 消火

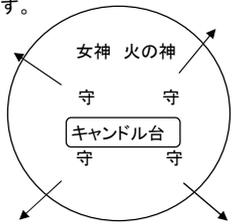
- 火の守は、5本のろうそくを残して消火する。
- 女神・火の守は、火のついているローソクをキャンドル台から取り、配置につく。

4 火の神の閉会の言葉

- 女神は、火の神をローソクの明かりで照らす。「資料2-例5」

5 分火

- 火の司の合図で、火の守は左右に分火し、隣・隣と分火する。これを続けて火の輪がができるのを待つ。「資料2-例4」
- ※BGMを流すと効果的である。



6 火の守の誓いの言葉

- 火の守は、分火を受けたら立ち上がりローソクを右手に高く掲げながら、誓いの言葉を述べる。
- 誓いの言葉は、友情、情熱、生命、平和、理想、奉仕、規律などをヒントにする。「資料1-例3」
- 火の神が、4人の守に分火を終えたら、火の係4人は点火の位置につく。

7 詩の朗読

【例】

・八ヶ岳高原に、南にそびえる富士山に、そして南アルプスの山々に今日も夜のとばりが落ちました。ここ八ヶ岳少年自然の家での宿泊研修に参加し、仲間の友情と団結を深め力強く生きることが願って、ここに集う皆さん、今日ここに灯されようとしているキャンドルの火、この火は弱くともひとたび燃えさかれば、すべての醜さを焼き尽くし、世の中を明るく正しく力強く生きるための情熱を得る原動力となるものと信じます。聖なる火のもと、今宵楽しく過ごそうではありませんか。



6 誓いの言葉

- 火の神に向かって行う。
- 【例】私達の青春を象徴するかのように静かに燃え上がる炎の中に、お互いの友情を確かめ合い、共にひとときの美しい思い出と未来のために、聖なる火に誓います。いかなる悲しみにもくじけず、それを克服する強い信念と体力を持って前進することを、この火に誓います。

7 詩の朗読

- 【例】〜くじけちゃいけない〜
- ・いつの日か母が言った、早く大きくなって立派な人になれと、その時が夢のようにやってきた。そこには幼い日のように、何時までも甘えることはできない。悲しい時も、苦しい時も繰り返してやる。だけどくじけちゃいけない、踏まれても、折られても、雑草のように耐えていくんだ。そして富士山のごとく、より高く、より美しく、より逞しく、そこにはきっと幸せが待っている。友よ明日を呼ぼう限りなき前進のために、幸せのために。

8 点火

- 火の神の点火の合図で点火する。
- 火の神、女神、火の守は元の場所に戻る。

9 歌

- 引き続き、楽しい第2部に入れるよう、楽しく、愉快的な歌を歌う。「若者たち」、「おお牧場はみどり」

8 歌と火の神退場

- 「今日の日はさようなら」を歌う。
- 歌が2番になったら火の神を先頭にゆっくり退場する。

9 全員で握手と退場

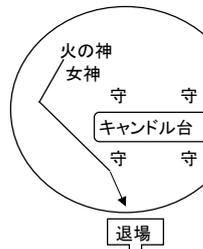
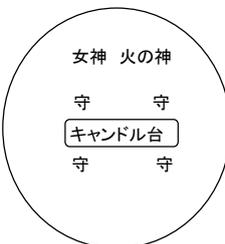
- 全員ろうそくを右手に持ち、友情の握手をかわし退場する。
- ※握手する時は、一人一人「ありがとう」、「おやすみなさい」等の声を掛け合う。
- ※各自ローソクは、出口で消火する。

10 火の係退場

- 歌が2番になったら、火の係は静かに退場する。

第2部 交歓の集い (約1時間) 展開例

- 各班のスタントの発表する。
- 歌、ゲーム、フォークダンス等だれでも知っているものや、全体でできるものを取り入れる。
- ユーモアに富んだ効果的な演出をする。



キャンドルサービス 言葉例 1

(資料1)

例1 キャンドルサービスの意義、ルール

○例1-1

キャンドルサービスは第1部、第2部、第3部の順で行われ、第1部は火を迎える儀式で、中央のローソクに火をともします。

第2部は、ろうそくの火を囲んで親睦を深め合う楽しい一時です。

第3部は、火を送る終わりの儀式です。

第1部と第3部は儀式ですので、絶対私語は慎み厳粛に行います。もし違反者があると、そのとたん儀式の意味がなくなってしまう。儀式では、司会者の言葉を、できるだけ理解していく気持ちで、また、日頃を反省してみたり、これからの「真の人間としての生きざま」を考えてみたりする機会としてほしいと思います。

○例1-2

体も心も洗い清められるようなハケ岳高原の大自然の中にあり、自然に親しみながら…(利用のねらい…)ただいま自然の家で暮らしているのです。お父さん、お母さん、そして先生たちが「君たち」〇〇生に対しての期待が大きいらななんです。それは、これからの生活において、どんな困難にぶちあたっても、それに打ち勝ち、強く、明るく、正しく、そして美しい生活を送ってほしい、また、どんなにか君たちがもっともっと良い子になってほしい、という愛があったからだと思います。そういう意味において、今夜のキャンドルサービスは精一杯のことをやってみたいと思います。それでは友情の灯火が入場して参ります。

○例1-3

中央のキャンドル台に燃え盛っているローソクの一本を見つめてください。ごらんささい、ローソクは、自分の身を焼きながら、回りを明るく照らそうと努めていてくれます。また、ローソクは、自分の身をすりへらしながら、回りを暖かくしようとしています。この姿は、両親の姿ににていると人々は言います。いや、両親だけじゃないんです。〇〇生あなた方が、回りの人々を明るく、美しく、暖かくつつんであげられるような、そういう〇〇生になってほしいんだ、ということを示しているんです。とにかく、私たち

例2 火の神の開会の言葉

○例2-1

今、女神によって運ばれてきた、この小さな火は、数分前までなにも見えなかったこの集いの輪に、ほのかな明るさを与えたことと思います。火は遠い昔から私たちに生きることの喜びや勇気を与えてくれたものです。火は自らを焼きつくしながら光と熱とを私たちに与えてくれます。火は私たちの生命ともいえるものです。このことは、数千年の昔から私たち祖先が火を守って、ある時は獣や外敵から身を守ったり、物をつくることを教えたり、明るくすることを考えたりしてきました。私たちは、この暗夜に光りを与える炎のように世界のすべてに明るさと希望を与えることを、共に誓いたいと思います。

○例2-2

私たちは、暗闇の中に静かに火が入場したとき、ある種の安らぎを覚えました。それは、一人ひとりの願いがはっきり見えたからです。私たち若人の情熱が燃えているからです。この火のように、私たちは若人の情熱をたぎらせ、暖かい友情と心のふれあいで、多くの仲間とともにより良い社会を築くことを誓いたいと思います。

例3 火の神の分火の言葉及び火の守の誓いの言葉

○分火の言葉

- ・物事の成功は多くの人々の協力によるものです。協力の火を与えます。
- ・努力なくして感動は得られません。常に努力を続けるように、努力の火を与えます。
- ・人は心身ともに健康でなくてはなりません。健康な体で今後も学ぶために健康の火を与えます。

○誓いの言葉

- ・私たちは、心を合わせて友情を大切にします。
- ・私たちは、規律を守り良い習慣を身につけます。
- ・私たちは、燃えさかる炎のように強く逞しい情熱と意志をもち続けることを誓います。
- ・私たちは、火が人々をも温かくなくさめるように、お互いに優しく抱き、いたわり、友情を更に高めることを誓います。

例4 火の司の終わり言葉と分火

○例4-1

最後の夜もこうして時間は無情に過ぎてしまい、もう第3部も終わりの時間となってしまいました。本当に良くやってくれました。さすがは〇〇生です。火の守は、そのともし火を左右のお友だちうつしてあげてください。ともし火をもらった人は、順に、隣の人に移してあげてください。

○例4-2

そのともし火を右手で高く上げてください。「綺麗ですね」ここに集う〇〇生たちが、今このような素晴らしい綺麗な輪を作り上げ、友情と団結のちぎりを結んだことを意味していることだと思えます。どうかこの輪をいつまでも忘れないでほしいと思います。

それでは、そのともし火を自分の目の高さにしてください。そして、そのともし火の中に、もう一度小さい時のことを思い出しながら、お父さん、お母さんを思い出してください。この世の中で、一番あなた方のことを心配してくれているのはお父さん、お母さんです。あなた方が小さい時に熱を出して病気になる時、一晩中寝ずに看病してくださったのもお父さん、お母さんです。この熱がなかなか下がらず病院へ連れて行く途中「どうか神様、この子の熱を下げてください」と手を合わせ、祈りつづけたのもお父さん、お母さんです。「旅行に行こう」と思っても、「私は行きたくないよ」と言って、そのお金であなた方の好きな洋服など買ってくださったのもお父さんであり、お母さんです。また、食べたいものがあったても、自分は食べたふりをして、幼いあなたの口に運んでくれました。また、食べ物のがどに詰まらないように小さくして、あなたの口に運んでくれたのもお父さんであり、お母さんです。

こうした言葉でしか親の恩を表現できませんが、こうした両親の愛によって、私たちはすくすくと立派に成長できたのだと思います。どうか、自然の家で学んだいろいろなことを、これからの生活の中で生かしていってください。

例5 火の神の閉会の言葉

○例5-1

一つの火は小さくとも、それが集まった時には、偉大なものになることを学びました。この研修で、このハヶ岳少年自然の家で得たものは、小さなものかもしれませんが、しかし、それが集まった時大きな力となり、大きな仕事ができるでしょう。心にともった火は小さくとも、一生大事に持ち続けようではありませんか。さあ、新しい希望に向かって歩きだしましょう。

○例5-2

楽しい集いの間、私たちを見守ってくれた炎は今静かに消えてゆこうとしています。炎は、私たちの胸にいつそう激しく青春の情熱と仲間意識を残してくれたことと思います。青春は、時には、辛くさびしく、また時には悲しく、涙することもあるでしょう。しかし、この集いで得た限りない感動と明るく躍動する仲間たちとの絆を思い出せば、また明日からの力強い勇気も湧いてくると思います。

ここに集いを閉じるにあたり、皆さんの健康と発展を祈りながら、最後に、皆さんとともに私たちに感動を与えてくれた全てのものに、感謝と敬意の拍手贈ろうではありませんか。

例6 火についての話

○例6-1

人間と動物の違いは何でしょうか。それはいろいろありますが、大きな違いは、私たち人間が「文化」というものを持っていることです。そのシンボルが「火」なのです。火を自然の中から取りだして使えるようにした人間は、その火のおかげで明かりを得、暖かさを得、物を美味しく食べる方法を得ました。ここに動物との決定的な違いが生まれたのです。「火」は、ありがたいものです。人間の生活に絶対欠かすことができません。しかし、火は恐ろしいものでもあります。そう火事、皆さん火を大切にしようではありませんか。